

Wings for Japan～津波被災児15人スイスへの旅

中東生

2012年05月01日

ソーシャルリンクをとばして、このページの本文エリアへ

マグニチュード9の巨大地震から約1週間後の2011年3月19日、ベ아트・プフェンドラー氏はスイス航空の客室乗務員として東京発チューリッヒ行きの便の機上にいた。



🔍 普段は写真撮影出来ない場所で、最初の思い出ショット（写真1）

「日本から脱出しようという人間で満席になるのではないか」という彼の予想に反して、機内は異常に空いていた。離陸後すぐ眼下に見えたのは、津波でめちゃくちゃに破壊された海岸に雪が降り続ける光景だった。

「自分の真下に、今も、寒さの中、助けを求めて凍えている人がいるはずだ。この飛行機の空席にそんな人達を乗せて、温めてあげたい」と痛切な心の叫びを覚えた彼は、被災地の子供たちをスイスに招待するという企画を思いつき、その実現に向けて歩み出すのである。

スイス航空のCEO、ハリー・ホーマイスター氏に電話すると、二つ返事で承諾してくれた。早速、日本のあしなが育英会、日本赤十字社、日本大使館などに問い合わせた。しかし、救済システム自体が出来上がっていないので、津波被災児の状況が把握できていなかった。子どもたちの方も、行方不明の家族に会えるまでは、現地を離れたくないなどの理由で遠くへ行きたがらない。何より、津波で家を流されたため、パスポートはおろか、自分の身分証明、姓名すら告げられない子供達も少なからずいた。

そこで彼は、実行を1年後に設定、準備を始めた。同じくスイス航空の客室乗務員である妻の裕子さんとともに『Wings for Japan』と銘打って、津波被災者のための長期的ケアを目的とした団体を発足させた。

その頃、文藝春秋8月号臨時増刊号として『つなみ』と題した、80人の被災児の作文集が出版され、大反響を呼んでいた。ジャーナリストの森健さんが岩手、宮城の被災児に依頼し、生の声を編纂したもので、この文集に投稿してくれた子供達と連絡が取れるネットワークが出来上がっていた。この中から15人を選び、今年3月27日、彼らはスイスに旅立つことになった。

経済的な問題は、費用を3分割することで解決した。成田空港までの費用を文藝春秋が負担してくれた。スーツケースすら津波に流されてしまったような状況の中、一人一人の旅支度、雪の残る山岳地帯に滞在するための防寒道具など、準備しなければならない物は沢山ある。当時の写真には、真新しいスーツケースを押す子供達の姿が収まっている。そして、成田空港近くのヒルトンホテルで1泊し、空港内のレストランで全員が落ち合い、そこからチューリッヒ空港まではスイス航空がすべてオーガナイズした。

『Wings for Japan』はスイス観光局、ユングフラウ鉄道の協力を得て、スイスに滞在する子供達が喜びそうなプログラムを実現させた。プフェンドラー氏は、実行前の3カ月間働き詰めだったという。出発当日はみずから東京まで迎えに行き、日本を発った一行はチューリッヒ空港でのウエルカム・パーティーでもてなされた（写真1）。

一行は翌日、疲れも見せずユングフラウに登り、『日本、がんばろう』の旗を掲げた（写真2）。その次の日は雪山ハイキングを試みた。標高3000メートルの山々は3月でも非常に寒い。みんなの防寒は万全だろうかとチェックしていたところ、『Wings for Japan』の会計担当者がスポンサー会社の社員と一緒に防寒ウェアを沢山持ってやって来た。



「頑張るぞ！」と、それぞれの想いを込めて掲げた日の丸
(写真2)

「この中から合う物を見つけて着て下さい。必要ならば日本に持って帰ってもいいですし、いらなければ置いていってもいいです」。サイズも豊富に揃っていたのに、ある男子はブカブカの防寒コートを選んで着ていた。まわ

りがサイズ選びを手伝おうとすると、「津波であまりにも寒かったから、もう2度と、コートから手が出ている状態になりたくない」と話したという。

ほとんどの子供たちにとって、仮設住宅や避難所に残っている友だちのためのお土産が気になりだったので、この日に沢山のお土産も買い込んだ。

3日目は馬車やパラグライダー、ロープパークなど、興味がある物を体験した。夕方にはブライアン・アダムズのオープンエアークンサートがあった。日本円で3万円以上もするチケットだったが、5枚を提供してもらい、年長の子供達が参加した。母親を津波から救ったという最年長、17歳の男子は、期間中一度も笑顔をみせなかったが、このコンサートの時だけは満面の笑みを浮かべていたと、プフェンドラー氏は回想する。別の16歳の男子は津波でギターが壊れて、ずっと弾いていないという。プフェンドラー氏は息子に買ってあげたが、ほとんど使っていないエレキギターをプレゼントすることにしたそうだ。

人々の温かさに触れた子供たちは、津波の体験を徐々に語り始めた。津波で母親と4カ月の弟を失ったまいちゃん、津波に飲まれ、ずぶ濡れのまま2日間雪の降る山を彷徨い、山寺のお坊さんに助けられた一家の姉妹、はるなちゃんとなつみちゃん、両親を早く亡くし、祖母に育てられていたところへ、祖母も津波にさらわれたまさと君ととしひこ君ら。彼らは他人の運命にも耳を傾け、自分の気持ちも吐き出し、被災児は精神的回復へ、また一歩踏み出し始めたようだった。



旅行開始時とは別人のように生き生きとしてきた子供達の顔が嬉しい

子供たちを温かく包み込みながら、自発的に心を開かせ、治癒の手助けをすることこそプフェンドラー氏が意図したことだった。

最終日には、チューリッヒ動物園見学の後、4つのグループに分かれ、フラウミュンスター教会などを回った。その頃には、はしゃぎ過ぎて注意しなければならないほど元気になった子どもたちを目の当たりにして、プフェンドラー氏は、今後も長期にわたるサポートを決意したという。彼はスイスで『ゴッテ（スイス版ゴッドマザー）』希望者を募り、現在2人の女性が名乗り出ている。今後は細かなサポートもする予定だ。例えばペンフレンドを希望する子には手紙を書き、「またスイスにきたい」と願う子には、長期滞在や、永住さえも視野に入れて、対応する体制を考えている。

第1回の被災児スイス滞在を無事サポートし終えたプフェンドラー氏は、復活祭の間だけ息子、娘が待つスイスの自宅で過ごし、再び日本へ発った。すでに彼は、第2回のツアーの計画に着手している。心ある人達の申し出により、現在、費用の4分の3の見通しはついているそうだ。被災者の心の傷が、少しでも和らげられるよう、地道に活動を続けて行くつもりだという。

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.